

27年度版教科書つれづれ 25 「おにごっこ」(光村図書・小学2年)の巻

加藤 郁夫(読み研事務局長)

「おにごっこ」は光村図書・小学2年生(下)の説明文である。この教材は23年度版(以下旧版)で登場したもので、27年度版(以下新版)も引き続いて収録されている。基本的な内容や展開に変更はないのだが、文章表現は、新版ではかなり変わっている。

最初に、「おにごっこ」の文章構成を示しておく。構成の上では、新版も旧版も同じである。

| | |
|-----|-------|
| はじめ | 1段落 |
| 中 | 2～5段落 |
| 中1 | 2段落 |
| 中2 | 3段落 |
| 中3 | 4～5段落 |
| おわり | 6段落 |

全体で六つ段落があり、1段落はまったく異同がない。1段落は文章構成「はじめ—中—おわり」の「はじめ」に相当する箇所である。

6段落が「おわり」に相当し、ここも一ヶ所変更はあるが、ほぼ同じである。

今回の改訂での変更箇所は、「中」にあたる2～5段落に多く見られる。

1段落で次のように述べている。

①おにごっこは、どうぐがなくても、みんなでできるあそびです。②おにごっこには、さまざまなあそび方があります。③どんなあそび方があるのでしょうか。④なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。
*①～④は加藤が便宜的に付したもの

③文・④文がこの文章全体の問題提示になっている。

「どんなあそび方があるのでしょうか。」という問いと「なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。」という二つの問いがある。小学二年生には問題提示ということばはむづかしいので、「おにごっこ」においては「問い」とする。説明的文章の読解において大事なことは、子どもがこの問いをきちんと意識するようにしていくことである。「おにごっこ」の読解において、問いをきちんとつかみ、その上でこの二つの問いに対する答えを読みとることに子どもたちが向かっていけるようにするのである。

説明文の授業では、子どもが何を読み取ればよいのかをわかるようにしていくことが大切である。その「何」に当たるものこそ問い(問題提示)なのである。言い換えるなら、問い(問題提示)をつかむことは、読みの方向性を明確にすることなのである。

やや本題からは逸れるが、大事なことなので少し補足しておく。説明的文章の読解においては、問題提示をつかむことで、その文章で何を読みとればよいのかがおおよそ明らかになる。読み研が説明的文章において「はじめ—中—おわり」の構成を問題とするのも、主として問題提示と関わっている。「はじめ」の読み取りにおいて重要になるのは、問題提示である。問題提示を読み取るとは、何について述べた文章なのか、どのようなことを述べようとする文章なのかを、読み手がつか

むことである。それは、読み手が文章の進んでいく方向をおおよそ理解することである。問題提示が曖昧なままで、「はじめ」を決定しても意味がない。それは、読み手が何を読み取ればよいのかをよく理解しないままに文章を読み進めることを意味する。そのような読みでは、読み手が気がなつたところ、面白かったところへと関心が向かう恣意的な読みに陥ってしまう恐れが大きくなる。問題提示をきちんとおさえることで、それに対してどのようにこたえているか、どのような説明や例を挙げているかという観点で読み進めることができる。文章の大筋を外すことのない読みが可能となるのである。問題提示は、航海における羅針盤である。問題提示を明らかにしないで読み進めることは、羅針盤を手にする事なく航海に出発するようなものである。

このことは、物語・小説の構造よみにおいて事件を読みとることと似ている。事件を読みとることで作品のおおよその組み立てが見えてくる。どちらも文章や作品を俯瞰的にとらえようとする読み方といえる。

本題に戻ろう。

「どんなあそび方があるのでしょうか。」という問いに対して、子どもたちそれぞれが文章内容を踏まえて答えられること、「なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。」に対しても同様である。これこそが説明文の読解の授業で、まず目指されなくてはならない。

旧版の学習の手引きでは「はじめ—中—おわり」に分けた表があり、「中」のところで「あそび方」と「わけ」をまとめるものが示されている。新版にも同じような表が出されているのだが、「中」の部分が「あそび方」と「あそび方のおもしろさ」をまとめるものになっている。それは次のような文章でも指示されている。

▼「おにごっこ」には、どんなあそび方が出てきましたか。また、そのあそび方には、どんなおもしろさがあるでしょう。

すでに見たように「おにごっこ」の1段落にある問題提示の文章は、新版においても全く変わっていない。ところが表にまとめるときには旧版が「わけ」、新版が「おもしろさ」なのである。旧版と新版の表を見比べると、「わけ」と「おもしろさ」は同じことを指しているようにみえる。旧版の「わけ」を新版では「おもしろさ」と言い換えたようにみえる。

この学習の手引きは「おにごっこ」の問いに対する答えを読み取らせようとするものといえる。問いが二つあるので、下記のようにABに分けて、それぞれについて考えていく。

A どんなあそび方があるのでしょうか。

B なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。

まずAの問いについて。

変更のポイントの一つが、Aの問いに対する答え、すなわち遊び方の示し方にある。新版の2段落の最初の文は次のようになっている。

あそび方の一つに、「てつぼうよりむこうににげてはだめ。」など、にげてはいけないところをきめるものがあります。

旧版では、次のようであった。

あそび方の一つに、「この先はだめ。」と、にげてはいけないところをきめるものがあります。

新版3段落の最初の文はこうである。

また、「じめんにかいた丸の中に入れて、つかまらない。」「木にさわってあれば、つかまらない。」のように、にげる人だけが入れるところを作ったり、つかまらないときをきめたりするあそび方もあります。

旧版3段落の最初の文は、次のようである。

また、「ここにあればつかまらない。」「こうしてあればつかまらない。」ということ、きめるあそび方もあります。

2段落・3段落における旧版と新版の変化をみると、「 」で括った部分が新版ではより具体的になっていることが分かる。とくに新版の3段落では「 」内を具体的にしつつ、その後のまとめもより詳しく丁寧に書かれている。

新版の改訂の方向性が、よりわかりやすい書き方を目指していることがうかがえる。

新版の4段落は次のように始まっている。

ほかに、「おにが交代せずに、つかまった人が、みんなおにになっておいかける。」というあそび方もあります。

これを旧版と比べると、違いがよく分かる。

ほかに、おにを交代せずに、つかまった人が、みんな おにになるあそび方もあります。

2、3段落といっしょで「 」で括る書き方になっている。この後の5段落も同様なのだが、「 」で括ってあるところが、遊び方を示しているのである。2年生の子どもたちにとっては、わかりやすい書き方になっている。

Aの問いに対しては、旧版よりも新版の方が具体的でわかりやすくなっているといえる。

一方、Bの問いについてはどうだろう。

新版の2段落は次のようになっている。

①あそび方の一つに、「てつぼうよりむこうににげてはだめ。」など、にげてはいけないところをきめるものがあります。②にげる人が、どこへでも行くことができたなら、おには、つかまえるのがたいへんです。③同じ人が、ずっと、おにをすることになるかもしれません。④にげてはいけないところをきめることで、おには、にげる人をつかまえやすくなります。

*①～④は加藤が付した番号

Bの問いに対して、②文や③文を答える子どももいるだろうが、一つの文に絞るとすれば④文が一番わかり易いと私は考える。なぜ「にげてはいけないところをきめる」のか。それはおにが、「にげる人をつかまえやすくな」るからである。

ところが新版の学習の手引きでは、「わけ」ではなく「おもしろさ」に変更されている。2段落のあそび方の「おもしろさ」が書かれている文はどれかと問われたら、みなさんはどの文を答えの文とするだろうか？

新版の3段落は次のようになっている。

①また、「じめんにかいた丸の中に入れて、つかまらない。」「木にさわってあれば、つかまらない。」のように、にげる人だけが入れるところを作ったり、つかまらないときをきめたりするあそび方もあります。②おにになった人の足がはやければ、にげる人はみんな、すぐにつかまってしまう。③このようにきめることで、にげる人がかんたんにはつかまらないようになります。④そ

して、つかれた人も、走るのがにがてな人も、すぐにはつかまらずに、あそぶことができます。

旧版の3段落は以下のようなものである。

①また、「ここにいればつかまらない。」「こうしていればつかまらない。」ということ、きめるあそび方もあります。おにになった人の足がはやいと、みんな、すぐにつかまってしまいます。②それで、にげる人が、かんたんにはつかまらないようにするのは、③じめんに丸や四角をかいて、にげる人だけが入れるところをきめれば、その中ににげこむことができます。④高いところにいるときはつかまらない、木にさわっているときはつかまらないときめれば、おにに おいつかれそうになっても、ひと休みすることができます。⑤こうすることで、つかれた人も、走るのがにがてな人も、すぐにはつかまらずに、あそぶことができます。

旧版の③文・④文の内容を、新版では①文に入れているため、文の数は少なくなっている。ただ、Bの問いに対する答えとして新版ではどの文を選んだらよいのだろうか。③文「このようにきめることで、にげる人がかんたんにはつかまらないようになります。」なのだろうか。それとも④文「そして、つかれた人も、走るのがにがてな人も、すぐにはつかまらずに、あそぶことができます。」なのか。旧版だったら、Bの問いに対する答えとしては⑤文が分かりやすかった。しかし、新版では③文と④文で迷ってしまう。特に④文は「そして」という接続詞を使っているだけに、答えは③文+④文ではないかとも考えられそうである。

私は、答えとしてまとめるのであれば③文がよいと考えるが、④文の「つかれた人も、走るのがにがてな人も」とあることで、なぜこのように決める遊び方をするのかがはっきり分かるという点では④文も捨てがたいのである。

新版の4段落は次のようになっている。

①ほかに、「おにが交代せずに、つかまった人が、みんなおにになっておいかける。」というあそび方もあります。②このあそび方だと、おにの数が増えていくので、おには、にげる人をつかまえやすくなります。③また、にげる人は、おにがひとりのときより、にげるところをくふうしたり、じょうずに走ったりしなければなりません。④「つかまりそうだ。」と、ドキドキすることもふえて、おにごっこが もっとおもしろくなります。

④文に「おもしろくなります」とあり、手引きにある「おもしろさ」を子どもたちが考えた場合、④文を選ぶ子どもがかなりいるのではないだろうか。Bの問いに対する答えとしては、私は②文+③文でよいと考える。「おもしろさ」とBの問いとのズレが4段落でははっきりと出てくるように思う。

旧版の4段落は以下のようなものである。

①ほかに、おにを交代せずに、つかまった人が、みんな おにになるあそび方もあります。②おにがふえれば、にげる人は、それまでよりもっと考えたり、じょうずに走ったりしなければなりません。③「つかまりそうだ。」と、ドキドキすることもふえて、おにごっこが もっとおもしろくなります。

これだと、Bの問いに対する答えは②文と考えてよいのではないだろうか。

新版の5段落は次のようになっている。

①ところが、このあそび方は、ドキドキして楽しいけれど、おにごっこがすぐにおわってしまいます。②そこで、おにがふえても、にげる人をつかまえにくくすることがあります。③「おににな

った人は、みんな手をつないでおいかける。」ときめるのです。④おにが三人、四人とふえてくると、手をつなぎながらおいかけるのは、たいへんです。⑤でも、このあそび方だと、手をつないだおには、力を合わせておいかけるという楽しさがくわります。⑥また、にげる人は、おにがふえるにつれて、つかまりにくくなります。⑦きまりをつけ足すだけで、おにごっこがすぐにおわらずに、あそびつづけることができます。

Aの問いに対する答えが、③文であることは明らかである。それでは、Bの問いに対する答えとなる文は何文だろうか。私は、④文+⑤文+⑥文の三文でよいのではないかと思う。ただ、ここでも「おもしろさ」といった時に⑤文や⑦文に目が行くのではないだろうか。

旧版の5段落は以下のようなものである。

①ところが、このあそび方では、どきどきして楽しいけれど、おにごっこがすぐにおわってしまいます。②そこで、おにがふえても、にげる人をつかまえにくくすることがあります。③おにになった人は、みんな、手をつないでおいかけるときめるのです。④おにが三人、四人とふえてくると、手をつなぎながらおいかけるのは、たいへんです。⑤こうすると、にげる人はつかまりにくくなります。⑥おにごっこがすぐにおわらずに、あそびつづけることができます。

Bの問いに対する答えとしては⑤文でよいのではないだろうか。⑥文まで含める考え方もよいかもしれない。

新版の手引きは二つ目の問いを勝手に「おもしろさ」に読みかえて問うている。そのことが結果的に、読みとりを難しくしてしまっている。手引きの問い方が文章と対応したものになっていないのである。

そしてもう一つ。Aの問いに対する答えの文の読みとりは、新版になってわかりやすくなっているのだが、Bの問いに対する答えの読みとりは必ずしもわかりやすくないのである。

「おにごっこ」は二年生の終りに位置する説明文である。そして子どもたちが初めて出会う「はじめ—中—おわり」の三部構成のきちんと整った説明文でもある。

それだけに、構成をすっきりととらえられること、さらには「はじめ—中—おわり」という構成を子どもたちがきちんと理解できることを大事にしたい。

ここまで見てきたように「はじめ—中—おわり」という構成はわかりやすいものの、問い—答えの関係を捉える上では、「おにごっこ」は複雑である。二年生の時点では、もう少しわかりやすい、子どもたちが答え探しにあまり迷わない文章にした方がよいのではないだろうか。その意味では、「おにごっこ」は二年生の終りに位置する教材としては、やや難しいのではないかと私には思える。